薬史レター

第53号

日本薬史学会　JSHP　2009年7月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16　(財) 学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

TEL (03)3817-5821　FAX (03)3817-5830　URL *http://yakushi.umin.jp/*

日本薬史学会 第2回柴田フォーラム

日　　時：2009年8月4日(火)　午後2時～4時30分

場　　所：昭和大学病院入院棟 17階 第2会議室(03-3784-8412)

東京都品川区旗の台1-5-8(東急線旗の台駅東口徒歩5分)

フォーラム参加費：無料

懇 親 会：4時30分～6時　会費3,000円　昭和大学病院17階 タワーレストラン

開会の辞：山川　浩司(日本薬史学会会長)

講 演 1 ：2時10分～2時55分

演　者：平林　敏彦((財)医薬情報担当者教育センター理事)

演　題：切手で綴る薬学の歴史

座　長：松本　和男(日本薬史学会理事)

講 演 2 ：3時～4時30分

演　者：望月　正隆(薬学教育協議会理事・東京理科大学薬学部教授)

演　題：薬学教育改革への薬学部の取り組み

座　長：津谷　喜一郎(東京大学大学院薬学系研究科客員教授)

進　　行：塩原　仁子(日本薬史学会フォーラム担当)

参加申込：mail:s.career@ofc.showa-u.ac.jp

FAX 03-3784-8959

◆ 当日、御来校の場合も受付致します。

◆ 会場・懇親会準備の都合上、成るべく事前申込御願い申し上げます。

主　　催：日本薬史学会

東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内

TEL 03-3817-5821

◆ 第2回柴田フォーラムに関するお問い合せは、

昭和大学薬学部　塩原　仁子　03-3784-8953

日本薬史学会 2009(平成 21)年度 理事・評議員会、総会

理事・評議員会

4 月 18 日(土)13 時より東京大学大学院薬学研究科総合研究棟 10 階の大会議室で開催した。2008 年度の事業報告、決算報告、2009 年度の事業計画、予算案などの資料を出席者 34 名に配布して、川瀬理事の司会、山川会長の挨拶で始まった。

従来、理事・評議員会と総会で二重になるような議題の説明を簡単にして、会員間の意見交換が出来るように全出席者 34 名から意見が述べられた。

本年度年会開催地の徳久和夫氏(石川県薬剤師会会長)、御影雅幸氏(金沢大学薬学部教授)が新理事に、また田引勢郎氏(成長科学協会)が新評議員に推薦された。

斎藤理事から北海道支部の支部活動と本年 11 月 14 日に支部発足 5 周年記念会開催を準備していると報告された。

国際委員会担当の津谷副会長から ISHP のニュースレター10 号(2009)が送付されたことに関連しての報告がなされた。13 時 50 分終了。

総　会

2 階の大講堂に移動して 14 時より開催。山川会長が議長となり 2008 年度の事業報告、収支決算報告をそれぞれ川瀬理事および高橋理事が説明した後、会計監査の結果は適正であることが杉山監事より報告された。

次いで、2009 年度の事業計画案、予算案と会則の一部改正案(支部に関する規定など)の説明が行われた。

以上の総会議事について議長より議案の了承が諮られ、会員の異議なく賛同されて、15 時に終了。

総会講演会

1)「日本へのキナ導入の足跡をたどる」

南雲　清二氏(星薬科大学 准教授)

2)「薬と倫理学」

加藤　尚武氏(鳥取環境大学 名誉学長)

総会講演会終了後、東京大学山上会館で懇親会が行われ、多数の出席者があり盛会であった。

日本薬史学会 2009 年会(金沢)の概要

日　　時：平成 21 年 11 月 7 日～8 日
年 会 長：徳久　和夫(石川県薬剤師会会長)
会　　場：金沢市　金沢大学自然科学本館(角間キャンパス)及び金沢都ホテル
主　　催：日本薬史学会・石川県薬剤師会
協　　賛：北陸医史学会・金沢大学・北陸大学・東洋医学会

後　　援：日本医史学会

研究発表：口頭発表(1 演題 20 分；発表・質疑応答を含む)

申込方法：FAX または E-mail で（薬史レター第 52 号に案内のとおり）

発表者は、発表申込時点で日本薬史学会会員に限ります。

発表演題の申込締め切り；平成 21 年 8 月 17 日(必着)

発表要旨提出の締め切り；平成 21 年 9 月 11 日(必着)

年会参加申込：FAX または E-mail

FAX の場合は、「日本薬史学会 2009 年会(金沢)参加申込書」(別紙)の項目をご記入の上、お送りください。

E-mail の場合は、添付形式にせず、メール本文に、別紙の項目に従って記載して送信してください。

参　加　費：①日本薬史学会年会；会員 3,000 円、非会員 5,000 円、学生 1,000 円

②懇　　親　　会；9,000 円(学生 3,000 円)

③学都金沢医薬探訪；6,000 円

年会事務局：連絡先；(社)石川県薬剤師会　　担当；河上康伸

〒920-0032　石川県金沢市広岡町イ 25-10

ＴＥＬ；076-231-6634　　ＦＡＸ；076-223-1520

E-mail；kenyaku@plaza-woo.jp

【 日 程 】

〔第 1 日目〕　11 月 7 日(土)

(金沢大学角間キャンパス)

11:00～12:00　特別講演Ⅰ『加賀の奇才　からくり師大野弁吉の医薬知識』

文学博士 本康　宏史(石川県立歴史博物館学芸課長)

12:00～13:00　理事・評議員合同会議

13:00～14:00　特別講演Ⅱ　『スロイスとホルトルマンの基礎医薬学講義』

金沢大学名誉教授 板垣　英治

14:00～16:30　一般発表

(シャトルバス移動)

17:30～19:00　懇親会(金沢都ホテル)

〔第 2 日目〕　11 月 8 日(日)

(金沢都ホテル)

13:30～16:00　市民公開講座『加賀藩と医薬』

・特別講演Ⅰ『伝統薬に光』

～アメリカで進む植物性医薬品(Botanical Drug)について～

金沢大学大学院医学系研究科　特任教授　鈴木信孝

・ 特別講演Ⅱ『加賀三味薬と幕末・金沢図屏風に描かれた宮竹屋について』

石川考古学研究会　米澤義光

◎学都金沢医薬探訪(金沢駅前～金沢駅前 09:30～15:00　参加費(6,000 円))

別　紙

日本薬史学会 2009 年会(金沢)
参加申込書

フリガナ 氏　　名			
所　　属			
住　　所	〒		
TEL		FAX	
E-mail			

参加費(○ で囲んでください。)

1. 日本薬史学会年会；

会　員	3,000 円
非会員	5,000 円
学　生	1,000 円

2. 懇親会

会員・非会員	9,000 円
学　生	3,000 円

3. 学都金沢医薬探訪

参　加	6,000 円

演題申込書・年会参加申込書の送付先

(社)石川県薬剤師会　　担当；河上康伸
〒920-0032　石川県金沢市広岡町イ 25-10
TEL；076-231-6634　FAX；076-223-1520
E-mail；kenyaku@plaza-woo.jp

石川県薬剤師会
FAX：076-223-1520

高峰譲吉、野口英世が眠るウッドローン墓地

末廣　雅也

2008 年 5 月、退職後 20 年ぶりに 1 週間ほど、アメリカへの個人的旅行をする機会があった。米国勤務が既に 5 年となった筆者の長男とその家族を訪ねるのが目的で、適当な観光プランの連絡を受けた時に、高峰譲吉博士(1854～1922)の墓参を是非したいと依頼しておいた。この希望はメモリアルデーの 5 月 26 日に実現した。

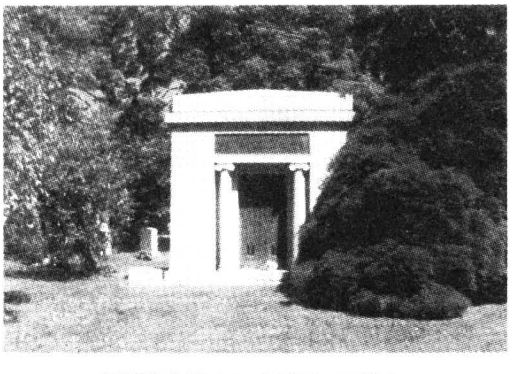
当時、長男は、ニューヨーク市郊外の Westchester County の Rye 市に居住していた。ウッドローン墓地(Woodlawn Cemetery)のあるニューヨーク市のブロンクス地区(Bronx)と Westchester County とは隣りあっているので、片道 30 分ぐらいのドライブであった。

1863 年に造成されたウッドローン墓地は東側と南側が斜面となった高台にあり、施設の保安、特に道路に接する柵のメンテナンスは厳重になされているようだ。有名人の墓地が多く、400 エーカーある域内は広々とした芝生と新緑の木立の間に道がつけられている。以前訪れたことのあるワシントン市対岸のアーリントン墓地のように観光バスが寄るような名所(？)とは異なり、歩いている人は殆ど見掛けず、静寂が保たれていて、初夏の陽射しが眩しく、日本語の掃苔という語の片鱗も感じられない長閑さであった。

入口の管理事務所で貰った地図を見て、先ず高峰家の廟所の前まで来た。白色花崗岩で作られて、正面の上部に横長の青銅銘板は TAKAMINE の字を囲んで高峰家の家紋である矢車が両側にデザインされている。この廟所の周囲には紅葉、桜などが植えられていた。心をこめて一礼してから、少し退がって写真を撮した。

下記の伝記によると、1922 年 6 月より入院していた高峰譲吉博士は病院でカトリックに入信した。7 月 25 日、ニューヨーク五番街のセント・パトリック大聖堂での葬儀の後、柩はウッドローン墓地の納骨堂に納められた。その後、1925 年の命日に完成したこの廟所への遷霊式が行われたと記録されている。

高峰譲吉博士(1854～1922)の伝記として、没後最初に刊行されたのは塩原又策編『高峰博士』(1926)がある。この本は復刻され、大空社の伝記叢書 306 として 1998 年に刊行されたが、文体、用語、漢字などは大正時代のままである。本文は 98 頁であるが、ニューヨークで当時在留邦人のための邦字新聞「紐育新報」、一流紙の NEWYORK TIMES などの各新聞が伝えた葬儀および追悼の記事、さらにそれらのニュースを受けた日本の時事新報の論説、醫海時報、治療薬報、化学工業、日本醸造協会雑誌に掲載された追悼、回顧談や東京での追悼会の記事など合わせて 140 頁が収録されている。巻末に解説文 6 頁(筆者が担当)がついている。



高峰譲吉博士の廟所(筆者撮影)

平成の時代になって、科学ジャーナリストの飯沼和正、内分泌生理学者の菅野富夫両氏により詳細に、且つ今日的視点で執筆された『高峰譲吉の生涯―アドレナリン発見の真実』が朝日選書 666 として 2000 年に出版された。読みやすいので、年譜の一部を引用させて頂きこの小文

を記した。

譲吉は加賀藩の蘭方医の子として嘉永7年(1854)に母親の実家である高岡の酒造家で生まれ、金沢で育った。慶応元年(1865)10 歳にして藩命を受けて長崎に留学した。既に通商条約も結ばれて、欧米各国人の住む町での3年間の勉学で英語、数学、理科などを学び、西洋の文物を次々と受容する市民の生活を肌で感じ取ったことと想像する。京都、大阪などを遍歴した後、明治5年秋に上京して新政府の工部省の官費修技生となった。翌明治6年(1873)7月に開設された工学寮(後に工部大学校、東京大学工学部となる)に第一期生として入学した。工部寮の教官は全て一早く産業革命を成し遂げた英国より招いた若手のお雇い外人であった。

明治12年(1879)応用化学科を首席で卒業し、翌年、工部省より3年間の英国留学を命じられ、グラスゴーの大学で学んだ。在学中人造肥料(燐酸肥料)の工場実習を経験した。

明治 16 年、米国経由で帰国した譲吉は農商務省工務局に勤務した。この時譲吉は「西洋で発達した工業を企画するならば、その技術に熟練した西洋人を雇う方が良い。留学によって得た知識、技術で日本固有の工業製品の改良を進めるべきだ」と考えた。

明治17年秋には米国ニューオリンズでの万国博覧会(開催期間 1884 年 12 月 1 日～1885 年 5 月末)へ日本政府より現地事務局要員の一人として派遣された。9月末に横浜出帆、帰国は翌年9月となった。順調にテクノクラートとしてスタートしたが長期に亘るニューオリンズへの出張は譲吉のその後の人生行路に変化を与えることとなった。その事を飯沼、菅野の著書はニューオリンズ出張での三つの“収穫”と指摘している。

首都ワシントンを訪れて先進諸国の特許制度を調査し、関連資料を収集したことが第三の“収穫”であるが、帰国した譲吉は新設早々の専売特許所(所長は高橋是清)兼務を命ぜられて、翌年には農商務省特許局次長となった。

博覧会場で実物の「燐鉱石」を展示品の中に見つけたので、産地のサウスカロライナ州チャールストンに赴き、採掘現場、肥料生産工場を視察して鉱石及び燐肥 10 トンを私費で購入して日本へ発送したことが第二の“収穫”と記されている。

明治 19 年、譲吉は人造肥料製造会社の設立の必要性を渋沢栄一、益田孝ら財界人に説き、賛意を取り付けてその実現に動きだして、翌明治20年に「東京人造肥料会社」が正式に設立された。

ニューオリンズでの第一且つ最大の“収穫”はヒッチ家のキャロライン嬢との婚約であったが、帰国して生活設計の見通しが立った明治20年(1887)に譲吉は結婚式を挙げ、花嫁を伴って帰国した。

明治21年、官職を辞し、東京人造肥料(株)の技術長兼製造部長に就任した。工場は当時、深川釜屋堀(現在の江東区大島一丁目)にあった。工場の隣地には譲吉自身で研究する「私設製薬所」を建てた。日本酒醸造の方法をウイスキー製造に応用しようとの構想で、一口でいうと麦芽(モルト)の替わりにアルコール発酵能の高い米麹を利用する方法を開発して特許を取得した。

明治 23 年(1890)には人造肥料会社退職の了解を渋沢社長より得て、シカゴに移住し、イリノイ州ピオリアの醸造所での実験生産に成功して、米欧各国に特許出願した。この地での事業は成功したが、火災や疾病などで苦労したが、タカジアスターゼを創製して、消化薬として有効性が確認された。1897 年にパーク・デービス社が製品化して、譲吉は同社のコンサルタントエンジニアに就任した。明治 31 年(1898)西村庄太郎は譲吉よりタカジアスターゼの日本での輸入販売の承諾を得て、帰国後友人である横浜の貿易商塩原又作、福井源次郎の三人が出資して翌明治32年、三共商店を設立した。

それより前に、譲吉一家はニューヨークへ移住してマンハッタンに住居と化学実験室を構えた。明治 33 年(1900)2 月に訪ねて来た 24 歳の上中啓三を助手に採用した。

33 年(1900)2 月に訪ねて来た 24 歳の上中啓三を助手に採用した。

1884 年、副腎髄質に血圧上昇作用を示す成分の存在がロンドン大学生理学のシェーファーの教室より発表されて、ドイツ、米国などの多数の研究室がその本態解明の研究を競うように行っていた。譲吉にもパーク・デービス社より材料が送られて来てこの研究競争に加わることになった。

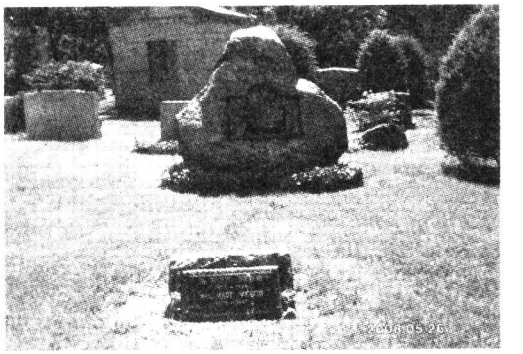
1900 年 6 月 29 日の朝、ブルピアン反応陽性の結晶が試験管底に析出しているのを認めた上中は隣室の譲吉に知らせた。更に実験を繰り返して、アドレナリンと命名して発表する一方、特許申請もなされたが、全て高峰譲吉一人の名での発表であった。日本薬史学会の創設功労者の一人の元三共の山科撫作常務取締役の随筆集「三共茶ばなし」(昭和 27 年、非売品)には上中の貢献が有りの儘記載されているが、残念ながらアドレナリンの発見者を高峰とのみ記されている本をいまなお見掛けることが多い。アドレナリン発見より 100 年を超える今日、飯沼和正・菅野富夫著は副題そのままの「アドレナリン発見の真実」を詳しく記している。巻末の「提言」で指摘された日本薬局方での「アドレナリン vs エピネフリン」問題も正常化されたのは 1996 年である。

その後、譲吉は大正 2 年、帰国した時「国民的化学研究所」計画案を講演して、大正 6 年には結実して「理化学研究所」が設立された。

現在の中学・高校生に相当する年代の時、郷里を後にして長崎、大阪などでの勉学により語学、理科などの知識を身につけたことはその後の工部大学校生活、英国留学で常に広い視野で、世界を、また日本をみるように磨き上げられ、在米実業家として絶えず日米友好に尽くされた功績を改めて慕んだ。

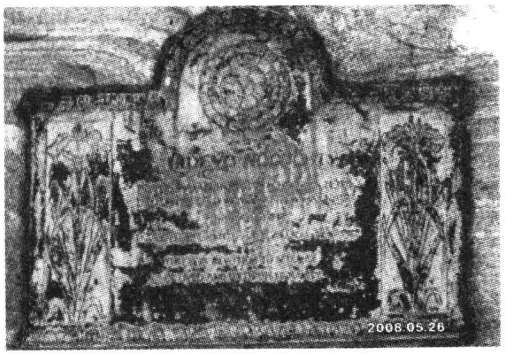
高峰譲吉博士の廟所の正面の道を横切ると南へなだらかな芝生が広がっている。野口英世博士(1876～1928)の墓があったので、同様に先ず一礼した。写真に示すように大きな自然石が墓石となって銅板の碑銘が英文で刻まれて、緑青が時の移りを物語っている。

日本では野口博士は高峰博士に較べると遙かに多くの伝記が刊行されている。また戦前の小学校教科書(修身、国語)を通じて立志伝は広く教えられた。その点は二宮金次郎と似ている。野口博士の生涯と業績を再確認するために、科学史家による実証的な伝記である中山茂著『野口英世』朝日選書 389(1989)を読んだ。



野口英世博士の墓石(筆者撮影)

野口は明治 9 年に貧農の家に生まれ、幼児の火傷による左手の不具というハンディキャップを負いながらも、勤勉でしっかり者の母親の愛情に育てられて小学校では良い成績をおさめたので、高等小学校へ進学した。手の不自由を訴えた作文で教職員、級友の同情を誘い、醵金の援助を得て、会津若松のアメリカ帰りの開業医の手術を受けることが出来た。秀才ぶりの目立ってきた野口少年はその後、恩師のアドバイスにより医師をめざし、医院の玄関番からスタートして書生となり、医術開業試験を目指して勉強した。



墓碑銘板(筆者撮影)

このように上昇気流にうまく乗り、また乗るためにはパトロンを見付けるという処世術をいつの間にか野口は身につけてしまった。明治 29 年 9 月上京して、会津での知人を訪ね東京での受験生活のスポンサーを見つけて

医術開業後期試験にも合格した。順天堂医院の助手を振出しに、大日本私立衛生会の伝染病研究所に勤務する機会を得た。ドイツ語以外の英語も出来る野口は図書係の職についた。明治 32 年、マニラで赤痢の大流行があったので米国より調査に赴く病理学者のフレクスナー教授が赤痢菌の発見者志賀潔博士を訪ねてきた。北里柴三郎所長は野口に通訳、案内役をやらせた。野口はこの機縁を一方的に上昇気流に仕立てたことは言うまでもない。横浜検疫所などに勤務して、次の上昇気流である米国留学の機会を狙っていた。

渡航費用を具面して明治 33 年(1900)には当時米国入国に必要な「見せ金」30 ドルを所持して最下級の船底の旅でサンフランシスコを目指した。ペンシルバニア大学にフレクスナー教授を突然に訪ねて、助手採用を懇願した。幸い、拒絶されることなく、白人研究者の嫌がる毒蛇を扱っての蛇毒の実験を手伝う仕事が与えられた野口は次第に認められて、1902 年ついに「蛇毒ノ血球溶解作用抗細菌溶解作用及毒性ニ就キテ」という研究論文をフレクスナーとの連名で出すことが出来て、デンマーク留学のチャンスを手にいれた。

フレクスナー教授のロックフェラー医学研究所長就任と共に野口もニューヨークの同研究所に移り、憧れていた『細菌の狩人』としての研究生活に入って行った。

1911 年に「トレポネーマ・パリドゥムの純粋培養」の研究が野口の名を国際的に有名にした。更に 1913 年には梅毒性麻痺患者の脳組織にトレポネーマの存在を証明した。この功績に対して帝国学士院は大正 5 年(1915)7 月学士院恩賜賞を授与した。野口博士にとってこの受賞ではからずも 9 月より 2 ヶ月間の休暇帰国で日本の学界より歓迎を受けると共に親孝行の機会を得た。

1918 年、野口はロックフェラー財団の黄熱病委員会よりエクアドルに派遣された。現在では黄熱ウイルスが病原で発症することが判っているが、当時、野口はワイル病の病原に似たレプトスピラ・イクテロイデスが病原菌であるとして、その抗血清や野口ワクチンを作ったが問題の解決には至らなかった。

野口は 1927 年 10 月アフリカのアクラに黄熱病の病原体研究に出かけたが、翌年 5 月、実験室感染で殉職して、6 月 13 日ニューヨークに無言の帰還をした。黄熱病患者の遺体のアメリカ国内への搬入許可を得るのは難しいことであったが、ロックフェラーの努力で可能となった。6 月 15 日午前、ロックフェラー研究所で牧師が立ち会って葬儀が行われた。霊柩はロックフェラーが買い求めておいたウッドローンの墓地に運ばれ、検疫当局の指示により柩を開けることなく埋葬したと伝記の終章に記されている。

中山の著書は終章の末尾で、細菌の狩人だった野口は、細菌学パラダイムからウイルス学パラダイムに移行していたことを知らずに細菌学の技術によりウイルスまで捕らえようとして、足を踏み外して谷底に落ちたようなものだと指摘している。野口の死の 2 年後、ハーバード大学のマックス・セーラー(Max Theiler；タイラーとの誤記を見かけることもある)は黄熱ウイルスをマウスの脳内に接種する方法を考案した。その後、彼はロックフェラー財団に移り、1937 年には変異株を開発して安全なワクチンが製造出来るようになった。彼は 1951 年、ノーベル生理学・医学賞を受けている。

第二次大戦後、英国領から独立したガーナ共和国の首都アクラにある医科大学には日本政府、福島県立医大が中心になって「野口英世記念基礎医学研究所」が設立されて、医療協力が行われてきている。なりふり構わずに己の生きる道のみを考えてきて異境の地で殉職した野口博士だったが、二十一世紀の日本のアフリカ外交上の重要な「アフリカ開発会議(TICAD)」でアフリカでの医学研究・医療活動で顕著な功績を挙げた人へ授与される「野口英世アフリカ賞」としてその名は不滅である。

〔書評〕

薬史こぼれ噺

「歴史の窓」改題

大橋　清信 著

今年(平成21年)の薬史学会総会で、“大橋先生はおいでにならないのですか”とある女性会員から聞かれた。大橋先生の柔和な笑顔と高潔なお人柄に惹かれる会員は多いと思われるが、その先生が『薬史こぼれ噺』という控え目な標題でご自分の労作をまとめられた。

本書は、富山県薬剤師会発行の広報誌「とみやく」に、平成8年から平成20年まで毎月寄稿した薬史に関するエッセイ風の読み物「歴史の窓」を改題してまとめ、富山県薬剤師会から発行したものである。著者の年齢も79歳から91歳を数えるに至って、ここらで一服して来し方を顧みることにしたと、あとがきに書いておられる。

昭和12年に富山薬専卒、母校の助手を経て家業の家庭配置薬業に従事、昭和19年に第一薬品化成K.K.(現テイカ製薬K.K.)に入社、取締役技術部長を経て常務取締役に、その後平成7年まで相談役を務められている。この頃は薬史学会総会にも富山から上京され、出席しておられた。現在は本会名誉会員である。

B5版466頁の本書は、133題のテーマからなる内容を擁し、その範囲は古今東西におよび、広範にして深く、身近な体験から書籍が伝える遠く欧米へ及ぶ話題を有しており、まさにきらきらと輝く薬史の宝庫といえるものである。かって「薬史学会通信」No.2からNo.15にわたり宗田　一先生は〔講座：くすりの歴史のとらえ方〕として薬史を究めるための手引きといえる日本医療の歴史を十回余にわたり書いておられたが、本書はそれに匹敵する薬史のテーマを豊富に擁しているといえよう。本文に関する文献も紹介されており、さらに詳細な調査・研究に進むこともできるのである。

また平成4年(1992)から薬史学会が催した「ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅」に参加された著者が、各国の医薬史蹟を目の当たりにしてその経験と旅の前・後の関連文献を繙いて深めた知識を綴ったエッセーがいくつかあり、同行の旅もあった筆者は、著者の学を究める態度に敬意を表するとともに、薬史学会が紡いだ良き時代の良き旅を思いおこして感慨もひとしおである。そしてもう一つ、大橋先生の瑞々しい感性に感動を覚えるのである。

一例をあげれば、筆者が1976年に数ヶ月滞在したウプサラについての記述、「ウプサラを訪ねて」では冒頭に、“・・・日本薬史学会の医薬史蹟を訪ねる旅に参加して、ストックホルムからハイウェイ・ヨーロッパ四号線をバスで小一時間の行程を北に66Km、折しも灰色の雲が一面に垂れ込める小雨模様の空の下に拡がる深い緑一色の田園の地平の彼方にウプサラの教会の尖塔を目にしたのは、1996年6月22日であった。・・・”と綴っている。

筆者はストックホルムからウプサラへは電車で何十回も訪ねているが、車での行程はこの時が初めてであった。街に近づくにつれて大聖堂の二つの尖塔が徐々に姿を現す光景に思わず息をのんで、これこそウプサラだと感動したことを覚えている。著者はすでに事前の調査でウプサラの歴史を勉強して参加され、79歳にしてこの若々しい感受性を披露しておられるのである。

薬史に興味があり、その研究課題を何にしようかと悩んでいる方には、「ルイ・パストゥール没後百年を偲びて」で始まり、「クロマトグラフィーの創始者M.S.ツウェットについて」の項目で終わる本書にまず目を通すことをお勧めする。そして九十歳未満の方々には、先人のたどった薬学人、薬剤師の真摯な歩みに襟を正し、己の進む方向の道標としても座右に置きたい書となるであろう。

(高橋　文)

〔書評〕

ドイツ科学史巡礼の旅 ①ベルリン

原田　肇著　(株)一二三書房(東京都千代田区)(2008 年 9 月)発行

ISBN978-4-89199-025-1　定価 3,500 円

筑波大学教授で生物有機化学を専攻された著者は、「歴史は社会の進行を記述するが、自然に対応して、如何なる結論に達したかを記述したものが科学の歴史である」と本書の“おわりに”記している。まさに本書はドイツ科学文化史の遺跡を訪ねた旅行記で、著者自身が、“科学史巡礼の旅”と呼んでいるように、著者自身が現地で撮影した豊富なカラー写真を主体として解説文を従として編集されている。本書を手にしたとき、筆者もまた著者に連れられて巡礼者となったように敬虔な気分を覚えた。十九世紀から二十世紀前半に世界をリードしたドイツの学者とそこに学んだ日本の先輩にも触れられているが、北里柴三郎とローベルト・コッホ交流の遺品の展示された記念室や森鴎外記念館は日独文化交流史に何時までも残ることであろう。

(末廣　雅也)

〔書評〕

土井　康弘著**「本草学者 平賀源内」**講談社選書メチェ

A5 版、221 頁、講談社　1,500 円

幕末の蘭学者で本草学者であった平賀源内について書かれた著書は少なくない。しかし源内は本草学者としてよりも江戸における才気煥発な活躍が、テレビやドラマで描かれているがその実像はあまり知られていない。

平賀源内は讃岐国(現在の香川県)出身で、香川県志度町に「平賀源内先生遺品館」がある。源内は 27 歳の時に大阪に出て医師の戸田旭山に師事した後に、江戸に出て本草学者の田村藍水から本草学を学んだ。本草学は動植物の薬物について学ぶ今日の薬学に近いものであった。

本書はこの本草学について江戸初期から中期の状況から、源内が本草学者になっていく状況を説く。将軍吉宗の支援もあって「東都薬品会」を開き、生薬類を展示紹介して全国に流通させた。ここに源内の活動の真骨頂が示されている。源内は生薬図譜を描き、その技量をさらに一般絵画作品まで発展させた。彼の本草学の才能は火浣布(アスベスト)を製造し普及させた。また鉱山の開発をはじめ絵画、戯曲と花を開き山師といわれる大活躍をした。しかしある人身事件の罪に問われて 50 歳で獄死した。本書は本草学者に重点をおいた平賀源内についての面が描かれている。

(山川　浩司)

［新刊紹介］

W. ミヒェル、鳥井祐美子、川嶌眞人　編著

九州の蘭学―越境と交流―　思文閣出版

A5 版、359 頁　2,500 円　　2009 年 7 月 1 日発行

織田、豊臣期から江戸期にかけて日本に多くの外国船が近づき、その中からオランダが長崎の出島という小さな築港で西洋文物を取引することが認められた。この長崎出島のオランダ商館長付の医師から西洋医学を学ぶため、日本各地から多くの若者が集まり西洋の近代医学、科学、博物学などが貪欲に吸収された。言葉は適切ではないが、これらの蘭学の知識は国内各地に「ねずみ講」のように蘭学が広められていった。

この本は「九州出身あるいは九州で活躍した蘭学者と外国人の事績を記した評論集」である。この本に取り上げられている 59 名の人物は、本書に先行する「医学風土記(恩文閣)」「長崎のオランダ医たち(岩波新書)」、江戸人物科学者(中公新書)などで取り上げられた西洋医学者、科学技術者のみではない。江戸期に蘭学の普及と実施に尽力した徳川期の大名、島津重豪、松浦静山、奥平昌高、鍋島茂義、島津斉彬、鍋島直正らも含まれている。

第一章、江戸前期(1586～1671 年)にはポルトガル人フェレイラ(日本名、沢野忠庵)他、日本人 8 名、第二章、江戸中期(1723～1779 年)には、スウェーデンのツュンベリー他、外国人 3 名、日本人 9 名、第三章、江戸後期(1781～1802 年)にはシーボルトらドイツ人 2 名、日本人 20 名、第四章、幕末(1806～40 年)にはポンペ、ボードウィンらオランダ医師他、日本人 11 名の 59 名に及ぶ人物についての事績が記述されている。

記述は簡潔ではあるが現在では最適な筆者 20 氏により分担執筆されている。適宜に人物や文書などの写真図版なども示されていて理解の助けになる。

九州に関する蘭学の人物評伝として、読者に的確に伝えられる決定版である。

(山川　浩司)

［新刊紹介］

天野　宏著

「薬の雑学事典」　講談社文庫

237 頁　581 円　　2009 年 5 月刊

本会会員の天野宏氏(東薬大卒)は、日経メディカルで健筆を振るってきた。薬に関する豊富な話題について、1. 薬の文化社会学、2. 薬の民俗学、3. 手軽な身近な薬の雑学、4. 薬の不思議な話、5. 薬の待ち時間に考えたい雑学、6. 日本の製薬あれこれ、

各項目を 2 頁に取り上げて 95 の項目の話題を記述している。話題は多岐にわたり、氏の豊富な博識に彩られて、読み手を引き込んで飽かさない。

お暇の折に、何処からでも良いから読み進めると、目からウロコという知識が得られるであろう。

(山川　浩司)

◆北海道支部だより

第56回北海道薬学大会における活動報告

齊藤 浩司(北海道医療大学)

平成21年5月30、31日に、札幌コンベンションセンターにて第56回北海道薬学大会が開催されました。日本薬史学会北海道支部は発足以来、毎年これに参画しています。今年も初日に総会と特別講演を行い、2日目には他部会との合同ポスターセッションで4名の会員が日頃の研究成果を発表いたしました。以下にその概要を報告いたします。

総　会

斎藤元護支部長のご挨拶の後、会則に従って支部長が議長となり、議事が進行されました。まず報告事項として、平成20年度事業報告(吉沢逸雄常任幹事)と同決算報告(本間克明常任幹事)がなされ、監査報告の後、承認されました。次に、高田昌彦副支部長から「支部発足5周年記念事業」の進捗状況について説明がなされました。本記念事業では、平成21年11月14日(土)13時から札幌市教育文化会館で記念式典と記念講演会(演者：山川浩司日本薬史学会会長)が、また同日夕にウェルシティ札幌(札幌厚生年金会館)で懇親会が開催されます。またこれに合わせて記念誌の発刊も計画されており、現在各担当委員が準備を進めています。

引き続き、平成21年度事業計画案と予算案についての審議が行われ、満場一致で承認されました。なお、総会への会員出席者は20名でした。

特別講演

今回の特別講演では、日本医史学会評議員・北海道医史学会代表幹事　島田保久先生を演者にお招きし、「蝦夷地の医師(くすし)」と題してお話を賜りました。また当日会場内には、松前藩の種痘医がアイヌの人々に種痘を施す様子を描いた版画絵を始め、島田先生がこれまでに収集してこられた蝦夷地の医療に関する大変貴重な資料も展示されました。ご講演では16世紀末から明治維新までに北海道内で活躍した医師(くすし)の足跡が紹介されました。今回の特別講演には54名(支部会員20名、非会員薬剤師23名、一般市民11名)の参加がありましたが、厳しい生活環境下での当時の医療活動における様々な苦労に思いを馳せながら、皆熱心に島田先生のお話に耳を傾けました。前日ほぼ徹夜でご講演の準備をしていただいた島田先生に深謝いたします。

会員発表

今回の北海道薬学大会の参加者は2,200名を超え、2日間にわたり各会場で活発な討論が展開されましたが、ポスター会場にも多くの参加者が足を運び、掲示された研究成果を前に熱心に意見交換をする光景が見られました。会員発表の演題は以下の通りです。

①「星一によるわが国最初のキニーネ製造と輸出事業」○山　朝江、三沢美和

②「薬学における温泉研究の歴史(Ⅶ)『舎密開宗』: 近代化学と温泉科学の黎明」○八木直美、田中稔泰、吉沢逸雄、高田昌彦

③「薬学における温泉研究の歴史(Ⅷ)-『舎密開宗』外編の内容検討-」○田中稔泰、吉田博文、八木直美、吉沢逸雄、高田昌彦

④「薬学における温泉研究の歴史(Ⅸ) -科学史的観点からみた『舎密開宗』-」○吉沢逸雄、八木直美、田中稔泰、高田昌彦